

般

二つの学会に出席して

原 野 昇

筆者はこの夏、第5回国際ランセスヴァルス学会と、第6回国際オック語学文学学会とに出席する幸運に恵まれた。前者は8月5日から12日までの8日間イギリスのオクスフォードで、後者は8月24日から30日までの6日間南仏のモンペリエで開かれた。

ランセスヴァルス (Rencesvals) というのは、フランス中世の有名な武勲詩 *Chanson de Roland* の舞台となったピレネー山中の一峡谷の名前であり (現代名: Roncevaux)、それ故にこの学会はフランス中世の武勲詩 (*chansons de geste*) という限られた範囲の研究者の集まりである。このたびの大会には、フランスをはじめ、イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、イタリア、カナダ、その他の国々から約80名が参加した。参加者は一部を除いてほとんど全員、会場の Lady Margret Hall という College に宿泊し、起居を共にした。会期中ボードレイ図書館の手写本室の見学も企画され、*Chanson de Roland* の写本中でも最も有名な *Manuscrit O* という12世紀中葉の写本をはじめ、バラ物語、狐物語などの写本に接することができた。会期8日間とはいえ、参加者の到着する開会日と出発する閉会日とを除けば正味6日間であり、そのうち国別委員会および総会が1日、また遠足が1日あったので実際に研究発表が行なわれたのは4日間であった。*Chanson de Roland* をはじめ種々の武勲詩について20余篇の発表が行なわれたが、その大半は文学的なものであった。

その点、モンペリエでの南仏語学会の方は多少様子が異なる。というのは発表が内容により3つの分科会に分けられて行なわれたからである。第1分科会には言語学的および方言学的研究 (現代) 第2は文学的なもの (現代)、第3は中世文学語学に関するもので、全部で90篇以上の発表が行なわれた。筆者は興味のある発表を選んで、主に第1と第3の分科会に顔を出した。このモンペリエでの学会は、ある意味では先のオクスフォードでの学会と対比的であった。特にその雰囲気においてそうである。オクスフォードでの学会は上品な行儀のよい学会という印象を与えるのに対し、モンペリエでのそれは参加者の宿舍も市街あるいは学生都市 (*Cité universitaire*) とバラバラでそれほど社交的でもなく、そういうことには意を払わない、粗野な、いわば普段着のま

まの気取らない学会という印象を受けた。しかし、学問というものはそういう外面的なものには左右されないはずである。ランセスヴァルス学会の方は、確かに世界に名の知れた斯界の専門家が多く集まり、研究発表の水準も高く、いわば粒が揃っていたと言えるかも知れない。しかし知的遊戯を楽しんでいるような発表は皆無であったとは言い難い。専門的知識の積み重ねだけでは学問は成らないのではないかという気がしてならない。この点モンペリエでの南仏語学会の方は参加者も大学で研究している人ばかりでなく、学校の教師や教会の聖職者などもあり多様で、それだけに多少未熟と思われる発表もあったかも知れないが、そこに何か聴衆の心に触れる、学問に対する純粋な愛情と熱意の感じられる発表が多かったのは何故であろうか。

その第一の理由は何と言っても郷土愛であろう。フランスでは、衆知の如く、中世以来、主に北部で話された *langue d'oil* と呼ばれるものと、南部の *langue d'oc* とが大きく対立していた。しかも12-13世紀には、南仏の *Troubadours* (吟遊詩人) のお蔭で、*langue d'oc* がかなり広範囲にゆきあたり、いわばその勢力を拡大していた。ところが14世紀から徐々に、特に15世紀以後は急速に北部のフランス語が南部においても公用語となり、それまで *langue d'oc* と総称されていた諸方言がフランス語の俚言的存在となったのである。それ故ここに参加している人々には、これら南仏の諸方言が消滅の憂き目に逢うことのないのを願うのみでなく、その往時の隆盛を再び齎さんとの熱意が伺われるのである。会場では現代南仏語で書かれた出版物の展示即売も行なわれていた。*Troubadours* の時代に話されていた自分達の国語が北のフランス語に征服されたという意識があるようである。そしてこの意識はこの学会に参加した人のみでなく、広く南仏人全体の心の中に根強く残っているもののようである。事実1968年の5月、フランス全体を揺がした例の5月事件の時には、“*Midi libre*” (南仏の解放) を合言葉に、あちこちに運動が展開されたとの事である。この意識が学問的意欲を高揚し、方言採集等実地の研究へと多くの人々を駆り立てているようである。その結果、フランス国内の地方別言語地図の作成、出版などは、北フランスよりも南フランスの方が進んでいるように思える。

しかしこの母語に対する情熱および郷土愛は、よほど注意しないと偏屈なナショナリズムと化し、その時点において学問もまた濁ってくるという危険性を孕んでいるのである。例えばこの会の正式の名称は：*V^e Congrès international de langue et littérature d'oc et d'études franco-provençales* (第6回オック語学文学及びフランコ・^{※註1}プロヴァンサル語研究国際大会) というものであるが、南仏諸方言を総称して *langue d'oc* (オック語) と呼ぶか、*provençal* (プロヴァンサル語) と呼ぶかについて意見が分かれているとの事である。当然のことながら、前者は *languedoc* 地方 (Toulouse, Carcassonne,

Montpellier, etc.)に住む人々によって主張され、後者はProvence地方(Marseilles, etc.)の人々によって支持されている。後者は、南仏が生み、南仏を愛し、南仏を詩った詩人Frédéric Mistral(1830-1914)の言語を南仏語の代表的なものと主張するのでmistraliens(ミストラル主義者)とも呼ばれている。南仏語が古くからlangue d'ocとも呼ばれていたのは事実であるし、またprovençal(プロヴァンス語)が狭い意味ではProvence地方を中心にした一方言を指すことがあるのも事実である。しかし多くの書物において、今日まで南仏語を総称してprovençal(ancien provençal, provençal moderne)と呼ばれてきた。例えばREW, FEW, ^{※註2}などの語源辞書もそうである。ここで南仏語全体をlangue d'oc(オック語)と呼ぶことを敢て主張する必要があるかどうか疑問が残る問題である。この分野における研究が、学問的でない要素によって毒されないことを願うのみである。郵送した資料が未着のため、思いつくままの感想を連ねたまとまりのない文章になったが、両学会の一端をでも知ってもらえたらと思い拙文を供する次第である。

註 1, Franco-provençal(フランコ・プロヴァンサル)とは、フランス南東部の、ローヌ河中流からリヨン地方、サヴォア地方、及びロマンド・スイスに至る地方の方言を総称するもので、言語的には北部フランス語と南仏語との中間的存在とされているが、どちらかと言えば南仏語の方に多少近い。この学会の名前が示すように、南仏語学会の中で一緒に扱われている。

註 2, REW=W. Meyer-Lübke, Romanisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg
FEW=W. von Wartburg, Französisches etymologisches Wörterbuch, Bale.

教 育 実 習

浮 田 三 郎

教育実習の感想を書けと言われ、今それを書き始めて、それに対して少なからぬ感謝の念が起きて来るのを感じる。見上げれば、冷々と広がる黒い空、木枯しに吹かれて、淋しく泣く枯葉、静かに、わずかにキラキラしておいでおいでしている川の黒い面、この灰色の地獄に向うかの様な冬へ